

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：17501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05765・19K20957

研究課題名（和文）障害者の学習を事例とした変容的学習論の理論的拡張

研究課題名（英文）Extension of transformative learning theory: focusing on learning of adults with physical disabilities

研究代表者

正木 遥香（Masaki, Haruka）

大分大学・高等教育開発センター・講師

研究者番号：00819831

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、成人学習論の古典である変容的学習論（Transformative Learning Theory）に「異質な他者」の視点を組み込むことで、同質な集団内での学習を想定した従来の理論から、構成員の流動性を前提とした学習の分析に耐えうる理論を再構築することを目的としたものである。具体的には、異質な集団たる健全者（健常者）に働きかけながら地域で暮らす権利の獲得を図ってきた障害者運動を事例とし、異質な他者同士が日常生活の延長として出会い、相互承認に至るための条件を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、文献調査をもとに、障害者の学習を支援する専門職の養成プロセスと、障害当事者が主体性を行使するための条件を比較しつつ、学習者の社会規範が変容的学習に及ぼす影響を検討した。その結果、当初から社会変革を目的として行おうとする学習に比して、学習者の身体性と社会規範の関連を再検討する学習の方がより学習者の主体性の行使に結びつく可能性が高いことが明らかになった。これにより、これまでの研究では十分ではなかった学習という視点をを用いて障害者運動を分析する可能性を切り開くとともに、実践に対する新たな視座を得たことが本研究の成果として挙げられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, transformative learning theory is re-examined by focusing on the how transformative learning theory which sheds light on storytelling and embodied knowledge. Earlier transformative learning theories tend to focus on the cognitive and rational dimensions of learning, at the expense of the emotional and social dimensions. In order to deepen the understanding of the emotional and social dimensions of transformative learning, narrative learning theory and somatic learning theory were utilized as complementary theories. Those studies suggested that transformative learning theory has a potential to empower people suffering from difficulties. This study contributes to the development of the theoretical study of transformative learning by exploring the various roles of educators and learners from a novel perspective and allowing for a theoretical comparison of discussions about transformative learning in adult education and other various fields.

研究分野：社会教育学

キーワード：変容的学習 成人学習論 障害者 ナラティブ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の対象は、1960年代後半の米国に端を發し、今日においてもなお主要な成人学習理論とされる変容的学習論( Transformative Learning Theory )である。この理論は、対話を通じ、固定化しがちな成人学習者の認識枠組みをより柔軟なものへ改める過程に着目する。そのため、多様な価値観の存在を認めたとうえで、主体的に自らの生き方を選択する力につながるものとして評価されてきた。

日本における変容的学習論の研究は、主に地域での学びを扱う社会教育研究の領域で行われてきた。しかし、1990年代に欧米圏から変容的学習論を受容する際に、日本における伝統的な農村共同体における学習との親和性が指摘されたことから、日本における変容的学習論の先行研究として具体的な学習場面を扱った研究としては、女性の学習をはじめとした同質性を持つ学習集団を想定した分析に限られていた。したがって、ライフスタイルの多様化が指摘される今日の時代状況をふまえると、日常生活から分断された実験室的な環境での学習のみならず、より多様性をもった学習集団を扱う理論へと拡張しなければ、冒頭に挙げた変容的学習論の特質が十分に活かしきれないといえよう。

以上の状況を踏まえ、本研究は、日本における変容的学習論の応用を考えるために、具体的な事例の検討を通して、日常生活との連続性をもつ、多様性を含んだ空間において対話が成立する条件の具体化を図ることを目指した。

### 2. 研究の目的

ダイバーシティ社会の構築が求められる今日、他者との相互承認は成人期の重要な課題となっている。本研究は、こうした要請に応えうるものとして、成人学習論の古典である変容的学習論に「異質な他者」の視点を組み込み、現代的再構築を試みることを目的とする。

そのための手立てとして、本研究では異質な集団としての健全者との対話を通じ、健全者社会による差別処遇の改善をはかってきた障害者運動を具体的な事例として取り上げる。これまで主に障害学において検討されてきた障害者運動は、社会的行為と直結しており、異質な他者との対話を積極的に行う反面、主体性が行使できることが前提としてあり、かつ運動の帰結としての処遇改善が行われた後の継続性には欠くという課題があった。他方で、変容的学習論は、主体形成に至るまでの過程を描き出し、生涯学習としての継続的視点を持つという特質がある。したがって、障害者運動を事例に変容的学習論の再検討を行うことで、双方の研究上の課題を相互補完し、個人の認識と社会的な状況の双方を視野に入れた、継続的な主体形成を目指す学習の構想を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究全体の目的を遂行するためには、(1)学習支援者、(2)学習者という双方の立場の検討と、(3)歴史的・社会的背景を踏まえたうえでの(4)総合的な考察が必要である。このような考えのもと、文献研究を中心とし、以下の手順で検討を進めた。それぞれの詳細と得られた成果については、「4. 研究成果」を参照されたい。

- (1) 障害者の学習を支援する専門職の現状についての整理
- (2) 変容的学習論の理論枠組みの刷新状況
- (3) 障害者運動における学習観の変遷の解明
- (4) (1)～(3)を踏まえたうえでの、柔軟な認識枠組みを身につけるための学習の諸条件の整理

なお、当初は理論的な検討のみにとどまらず、実証研究として障害当事者を対象としたインタビュー調査を予定し、一部実施したものの、調査対象者の都合により、やむをえず調査を中断することになった。理論的な検討としては一定の成果を得たため、実証に関しては今後の課題とした。

### 4. 研究成果

- (1) 障害者の学習を支援する専門職の現状についての整理

障害者の学習は、福祉、医療など、複数の専門家との関わりの中で生じてゆくが、それぞれの専門職を仲立ちする枠組みがなければ、うまく機能しない状況にあると考えられる。そこで、対人支援職の職能開発のプロセスを検討する中で、異なる専門職を仲介する概念として、省察概念を見出し、その役割を解明した。

主要な省察に関する議論を分析した結果、従来研究では、省察によって職業規範の拡張が行われることで連携が推進されるとみられていたが、実際には、省察が目的化している状況においては職業規範の強化が生じ、専門職同士の連携を阻害する構造をはらんでいることが明らかになった。

- (2) 変容的学習論の理論枠組みの刷新状況

欧米圏における変容的学習論に関する文献を検討した結果、近年の動向として、提唱者である J. Mezirow の理論を、理性を重視しすぎると批判し、非理性的な側面からなる変容的学習論のアプローチを模索している状況にあることがわかった。さらに、これまで変容的学習論を用いた

実際の学習場面の分析は高等教育機関を中心としていたが、非理性的な側面に注目が集まったことによって、途上国での学習などに応用の場が広がっていた。

以上の状況をふまえ、非理性的な側面に着目した変容的学習論の理論枠組みの到達点と課題を整理するため、この種の変容的学習論の第一人者である M.C.Clark の議論を辿った。分析にあたっては、Clark が自身の議論において自己をどのように扱っているのかを媒介とし、物語や身体を用いた学習をどのように位置づけようとしているのかを検討した。

その結果、物語や身体を用いた学習は、学習の中で自己と社会の関係性を再認識するものとして構成しようとした意図があったものの、自己の位置付けが一貫していない点で理論構成上の不備があり、改善の余地があることを示した。

### (3) 障害者運動における学習観の変遷の解明

障害者運動は、障害当事者が自身の手で自らの生き方を決め、実現するための社会運動として展開されてきたが、障害者支援の諸制度が整備されつつある現代社会においては、主体的な意識を形成することの重要性がより増している。それにも関わらず、障害者運動を対象とした研究では、こうした主体的な意識の形成を、学習という視点で検討したものはほとんど見られなかった。そこで、こうした視点が欠けた要因を解明するため、障害者運動と同時期に生じた学習権利論のその後の変遷と比較を行った。

検討の結果、1970年代の議論に関しては、障害者運動も学習権利論も、国や行政を相手に、公的な権利保障の実現を要求するための手立てとして学習が位置づけられていたという点で一致していた一方で、1980年代になると、学習権利論の側からコミュニティ形成という視点が芽生え、その時点で障害者運動と乖離を見せたことが明らかになった。

以上の検討の結果から言えることとして、上述のような議論の推移に伴い、主体の含意も徐々に変化していたにも関わらず、この点について十分に整理が行われなかったことによって、学習の意義を再検討するまなざしが後退していったのではないかと結論づけた。

### (4) 柔軟な認識枠組みを身につけるための学習の諸条件の整理

これまで検討してきた結果として、(1)で行った障害者の学習を支援する専門職の検討からも、(2)で行った変容的学習論の新たな理論枠組みの再検討からも、学習の当初から自己認識を拡張するための手段として変容的学習論を位置づけることで、かえって認識枠組みを矮小化する可能性があることが導き出された。また、こうした認識枠組みの矮小化の背景には、(3)学習に含まれる様々な概念が、歴史的・社会的な文脈を受けて変化しているにも関わらず、これらが未整理のまま混同されて語られることによって生じる、ということがあると考えられる。

以上の検討結果を踏まえると、多様な主体が混在する場において行う学習としては、当初から社会変革を目的として行おうとする学習というよりはむしろ、それぞれの学習者の身体性と社会規範の関連を再検討する学習の方がより学習者の主体性の行使に結びつく可能性が高いことが導き出せたといえよう。

このような新たな理論枠組みの実証については、上述した理由により、本研究では十分に組み込むことはできなかったが、これまでの研究では十分ではなかった学習という視点を用いて障害者運動を分析する可能性を切り開くとともに、実践に対する新たな視座を得たことが本研究の成果として挙げられよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 正木遥香	4. 巻 64
2. 論文標題 対人支援専門職における省察の意義:職種間連携の視点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 67-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 正木遥香	4. 巻 12
2. 論文標題 変容的学習論における物語と身体:M.C.Clarkの自己概念を手がかりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生涯学習・社会教育研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 正木遥香	4. 巻 65
2. 論文標題 障害者運動における主体形成の学習論の構築に向けて:1970年代・1980年代の学習権利論を手がかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 399-404
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 正木遥香
2. 発表標題 障害のある成人の認識変容に関する理論の検討:身体性と当事者性の関連に着目して
3. 学会等名 2018年度障害学会九州沖縄部会福岡研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 正木遥香
2. 発表標題 社会教育論における主体性の再考:教育支援をめぐる議論を手がかりに
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 正木遥香
2. 発表標題 支援者養成における省察の意義の再検討
3. 学会等名 中国四国教育学会第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 正木遥香
2. 発表標題 身体障害者の社会教育・生涯学習をめぐる論点と課題:欧米の成人教育学における議論を手がかりに
3. 学会等名 2019年度日本社会教育学会六月集会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 正木遥香
2. 発表標題 障害のある成人の学習支援論の構築に向けて:学習観の変容を手がかりに
3. 学会等名 2019年度障害学研究集会九州沖縄部会熊本研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 正木遥香
2. 発表標題 障害者運動における学びの諸相
3. 学会等名 中国四国教育学会第71回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----